

《シモン・ボッカネグラ》改訂における音楽とドラマの融合に関する研究
—初演版、改訂版、中期3部作との比較において—

渡邊 寛智

要旨

《シモン・ボッカネグラ Simon Boccanegra》(1857) はジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi (1813-1901) が作曲した 21 作目のオペラ作品である。初演はヴェネツィアのフェニーチェ歌劇場で行われたが大失敗に終わる。その後、このオペラは世の中から忘れ去られようとしていたが、初演から 24 年後の 1881 年に改訂という大手術を終え、今日我々が知るところの作品となった。

本論文は、実験的とも言える初演版《シモン・ボッカネグラ》で何が試みられたかを吟味し、アリゴ・ボーイト Arrigo Boito (1842-1918) の台本にもとづいて行なわれた改訂を通して、ヴェルディがベルカント時代から続く形式を脱し、「ドラマと音楽の融合」をどのようにして実現したのかを考察するものである。ここで言う「ドラマと音楽の融合」とは、音楽的な制約によって、ドラマの進行が妨げられることなく、音楽とドラマが同時展開することを意味している。

これまでも《シモン・ボッカネグラ》の初演版、改訂版の比較研究は数多く行われてきたが、新旧の差異に留まるものが多く見受けられた。そこで本論文においては、初演版とほぼ同時代に作曲された〈中期3部作〉との比較を行い、音楽における共通性、初演版の先進性、中期における音楽とドラマの融合がどこまで行われたのかについて考察した。そして、24 年という時を経て、初演版《シモン・ボッカネグラ》の改訂がなぜ必要となったのかを考察し、いかに改訂版がそれまでの作品にはない劇的効果をより高める表現方法で改訂されたのかを明らかにした。また、改訂後に作曲された《オテッロ Otello》(1887) との関係性や、ワーグナーの影響についても考察を行った。

第 I 章では、初演版《シモン・ボッカネグラ》の作曲の経緯と初演について調べた。その作品で、ヴェルディが求めたものは何であったのか。あまりにも斬新で演劇的要素の強い斬新な作品でヴェルディが初演版で何を試そうとしたのか。ヴェルディの真意についての考察を行った。

第 II 章では、初演版《シモン・ボッカネグラ》と〈中期3部作〉の音楽的比較を行なった。初演版と〈中期3部作〉と比較し、音楽における共通性、初演版の先進性、中期における音楽の継続性を中心に、音楽とドラマが一致した展開する「音楽とドラマの融合」がどこまで行われていたのかについての考察を行った。

第Ⅲ章では、改訂版《シモン・ボッカネグラ》の必要性について考察した。ヴェルディは初演版《シモン・ボッカネグラ》の後に《仮面舞踏会》、《運命の力》、《ドン・カルロス》を作曲した。そして、《アイーダ》というそれまでの集大成と言える作品を作曲する。しかし、ヴェルディは、《アイーダ》作曲の後、作曲の筆を16年間置く。なぜ、ヴェルディは作曲活動を中断したのか、なぜ16年後に作曲を再開したのかを明らかにした。さらに、《シモン・ボッカネグラ》の改訂がなぜ行われたのかについても考察を行った。

第Ⅳ章では、《シモン・ボッカネグラ》初演版と改訂版との比較を音楽とドラマの両面に分けて行った。それぞれの改訂が何を意味するのか、どのような意図で改訂されたのかを明らかにした。

第Ⅴ章では、ワーグナーの影響と改訂版と《オテッロ》の関係性を扱った。まずヴェルディ作品にワーグナーの影響があったのかどうかを検討し、改訂版《シモン・ボッカネグラ》と《オテッロ》の関係性について考察を行った。

第Ⅵ章では、以上の5章から明らかになったことをまとめた。改訂版《シモン・ボッカネグラ》は、ヴェルディが生涯にわたって目指した、継続性のある音楽とともにドラマが展開して行く「音楽とドラマの融合」を真の意味で完成させた作品であると考えられる。